

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 16 日現在

機関番号：24201

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2015～2016

課題番号：15H06543

研究課題名（和文）ひきこもり者の「居場所」支援における実践知の解明、および支援理論の構築

研究課題名（英文）Professionalism of youth work in "Ibasyo" in which social withdraw gathers

研究代表者

原 未来 (HARA, Miki)

滋賀県立大学・人間文化学部・助教

研究者番号：90760603

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の主たる目的は、「ひきこもり」の若者たちが集う「居場所」において、かれらにかかわるワーカーの実践知を明らかにし、その専門性について検討することである。参与観察とワーカーとの議論を経て、場づくりという視点の重要性、ワーカーが若者の能動性に注目する際に、Narrative Inquiryの考え方が示唆的であること、若者たちの変容はストーリーの再構築という観点から捉えられること、が明らかとなった。

研究成果の概要（英文）：The main objective of this study is to investigate the professionalism of the worker who is related to the social withdraw in "Ibasyo" (places where vulnerable young people gather). The following became clear through the participant observation and the discussion with the worker; 1) Importance of viewpoint of place-making, 2) The idea of Narrative Inquiry is significant so that workers may pay attention to young people's activeness, 3) The young people's transformations are thought from the viewpoint of restructuring of the story.

研究分野：青年期教育

キーワード：若者支援 居場所 ひきこもり 専門性

1. 研究開始当初の背景

(1) 若者支援の広がり

1990年代半ば以降、若者の学校から仕事等への移行過程は長期化・不安定化が進んでおり、若年失業者・無業者等が増大している。そうした若者の実態把握と支援に関する研究・取り組みは、近年、若者支援という新たな学問領域を形成しつつある。とりわけ、就労に踏み出せない「ニート」「ひきこもり」の若者への関心は高く、心理学、社会学、社会福祉学、教育学等で検討が進められてきた。

(2) 関連研究の動向

心理学・精神医学領域では、「ひきこもり」の状態像を神経症・精神疾患等の視点から分類し、その心理状況を明らかにしてきた。また、社会学では、類似概念として流布するニートとの異同に着目しつつ、後期近代社会における実存的不安にさらされる者として「ひきこもり」を捉えなおす研究などがある。若者の移行過程が全体的に不安定化する今日、不安定就労と失業、「ニート」「ひきこもり」を行き来するような動的プロセスも指摘されている。

「ニート」「ひきこもり」等の若者への支援に関しては、就労支援から、心理療法や家族療法、社会福祉領域におけるソーシャルワークまで、さまざまな角度からの実践報告・検討が進められている。近年は、就労へとすぐに踏み出せない層への支援関心が高まっており、そのなかで、フリースペースを用いた「居場所」支援が不可欠の支援方途として現場に浸透してきている。「居場所」は他者への信頼感を醸成し、社会への恐怖感を軽減する役割を果たすとされ、当事者にとっての「居場所」の意味を明らかにする研究などがある。

一方で、支援実践そのものに着目した研究はそれほど多くなく、実践紹介や報告にとどまる傾向がある。

(3) 実践検討の不足

教育学における若者支援研究の遅れとも関連して、支援実践への研究が大きく不足している。「居場所」に関する研究では、その多くが、参加する子ども・若者への着目に偏っており、「居場所」を支援実践の場として検討する視点が弱い傾向にある。そのなかで、「居場所」における支援者の教育的・専門的

働きかけは等閑視され、その実践的知識の内実はほとんど明らかにされてこなかったといえる。

10年余りで急速に拡大した若者支援領域では、支援の担い手もまた多様化しており、我流で支援を展開する団体も少なくない。2016年3月には、暴力的な手法を用いた支援団体が情報番組で紹介され、専門家や当事者らが人権意識の欠如を問題に記者会見を開く事態が生じた。若者支援実践に必要な視点やその専門性が学術的に蓄積されておらず、また、それら研究成果が現場に有機的に還元されない現状が、若者支援現場の混迷と実践深化の困難を一層加速させている。

2. 研究の目的

本研究では、「居場所」支援実践の検討をおこなうことで、現場に蓄積されつつある実践知の言語化・体系化をおこない、若者支援における「居場所」支援の専門性とその理論の一端を明らかにすることを目的とする。「居場所」支援は、各支援機関で経験的に広く取り組まれてきた一方で、その意義や支援方法が不明瞭であった。若者たちが自由に集い、多様な形態の参加・活動が想定される「居場所」での実践知を明らかにすることで、若者支援全体にかかわる知見も得られると考えた。

本研究の特色は、実践知の体系化を、支援現場との協同的実践検討を通じておこなう点にある。本研究の遂行それ自体が、支援現場に自らの実践を体系化する契機と力量を生み出す点に独創性がある。開始されて間もない日本の若者支援は玉石混交状態にあるが、そのなかで、実践者が自らの実践を省察し、言語化していくプロセスは、若者支援領域の専門性を確立していくことにもつながると考えられる。

3. 研究の方法

「居場所」支援における実践知・専門性の一端を明らかにするにあたって、以下の方法で研究をおこなった。

(1) Narrative Inquiry を援用した実践検討

Narrative Inquiry は、教育現場における

ナラティブという現象 phenomenon および方法 method の両方に着目することによって、教育実践を探ろうとする教育実践研究方法である。デューイの経験概念を下敷きに、人を、ナラティブ的空間でストーリーを生きる存在として捉えている。そして、場に参加する若者や支援者のもつストーリーに着目し、その相互作用を研究者と実践者が協同的に模索する中で、実践の深化が図られていくことが期待されている。本研究では、Narrative Inquiry に方法論的視座を得つつ、支援に内包される実践知を明らかにしていくことを試みた。

(2) 古参支援団体との実践検討

1970年代から子ども・若者支援を担ってきた支援団体に協力いただき、協同的な実践検討をおこなった。応募者は、2010年～2015年に当該団体のスタッフを担っており、5年間分の参与観察データが蓄積されていた。それを分析対象の主軸に据え、実践者と研究者が協同的に実践を検討する機会を数回にわたって設けた。検討にあたっては、Narrative Inquiry のストーリー概念も参照し、複数のスタッフとの協議をおこなった。

(3) 新参支援団体との実践検討

首都圏内で事業を展開する上記団体に加え、2016年度には、研究者が在住する滋賀県内の団体との実践検討もおこなった。こちらの団体は、学童保育を担ってきた団体であり、若者支援に新規に参入してきた団体であった。古参の団体との比較による検討が可能になることが期待されたほか、地理的観点から、頻繁に通いやすく、スタッフとの連携も取りやすいことから、検討に加えることとした。

(4) 近隣領域との比較検討

実践現場との検討を経て言語化された実践知は、欧州で蓄積されてきたユースワークの視点などと比較をおこなうことで、検討を深めることとした。ある一つの団体の実践報告にとどまることなく、「居場所」支援にかかわる専門性の端緒が捉えられるよう、支援の専門性や重要となる理念・視点といった観点での検討をおこなった。

4. 研究成果

本研究を通じて得られた知見は、以下のと

おりである。

(1) 「居場所」における支援実践は、若者個人への働きかけとともに、その場をどのような場として構想するかという視点からも模索・実践されていることを明らかにした。「個人」志向に対する、「関係性・場づくり」志向とでも言える支援の方向性が、具体的実践のなかから見出された。これらは、欧州ユースワークにおいて伝統的に重視されてきた事柄でもあり、ターゲット型を主とする若者支援 においても共通に重要となる実践視点であることが明らかとなった。

(2) Narrative Inquiry の視点を 若者支援 に援用することの固有の意義を明らかにした。世界で一大潮流となっている Narrative Inquiry は、日本においては、学校教育や日本語教育の現場で一部視点の援用がなされているにすぎない。Narrative Inquiry は、外から与えられたストーリーとの関係を新しいストーリーへと構成し直し、新しい生き方を模索する対象者の能動性を捉えることができる点にその意義があると言われる。ひきこもり等の状態にある若者のなかには、能動性を発揮する機会を奪われてきた者も少なくない。そうしたかれらが「居場所」でわずかながらに表出する主体性・能動性に注目するためには、Narrative Inquiry による検討とそのストーリー概念が重要な役割を果たすことが明らかとなった。若者支援 における実践的な方法論として、Narrative Inquiry の可能性と意義が示された。

(3) Narrative Inquiry に依拠した検討をおこなうことで、「居場所」に参加する若者たちの変容は、自らのストーリーを再構築するプロセスの中で生じていることが明らかとなった。スタッフらの実践から捉えれば、個別的な配慮、関係性の構築、多様な参加形態の確保、聞き取りあう場づくり等にかかわる実践を下支えに、若者たちの自己アイデンティティの書き換えにかかわる 支援 をおこなっていると見える。そのなかで、若者たちには自らの進路を歩んでいく主体が形成されていく様子が明らかとなった。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計3件)

原未来「若者たちに 安心の場 語れる場 を」教育科学研究会『教育』846号, pp40-47, 2016年, 査読無

原未来「ひきこもり周縁の若者たちのフリースペースをつくる」日本科学者会議『日本の科学者』第51巻6号, pp292-297, 2016年, 査読無

原未来「若者支援 におけるフリースペース実践 「居場所」で紡がれる若者たちのストーリー」日本臨床教育学会『臨床教育学研究』第3巻, pp110-126, 2015年, 査読有

[その他]

原未来「若者支援 における「プロセス」を問う」若者援助・政策と Social Pedagogy 研究会報告書「若者援助におけるユースワークの場とプロセスの専門性と公共性」, 2016年

6. 研究組織

(1)研究代表者

原 未来 (HARA Miki)
滋賀県立大学・人間文化学部・助教
研究者番号: 90760603

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

なし